研究テーマ：広島県に於ける軽度発達障害児支援体制構築に関する研究	
研究代表者（職氏名）：教授　土田玲子	所属：保健福祉学部作業療法学科
共同研究者（職氏名）：伊藤信寿、引野里絵（作業療法学科助手）、他４名	

Ⅰ　はじめに

日本では、軽度発達障害領域の専門家の育成や地域での支援システムの構築は始まったばかりであり、特に広島県は子どもの発達支援を行なう中核的専門機関が非常に少ない。

Ⅱ研究目的

軽度発達障害児に対する支援ニーズに基づいた支援体制を、子どもが生活する各々の地域で立ち上げ、地域に定着させるためのモデル活動の構築及び実践。

Ⅲ研究方法

県立広島大学に於いて軽度発達障害児を対象とするグループ支援活動をボランティア学生と教員で実施し、支援プログラムの検討、保護者支援、学生教育プログラムの検討を行う。

次に、支援活動を広める拠点となるターゲット機関を選定し、そこで地域のスタッフや保護者、学生ボランティアとともにモデル支援活動を行い、教育研修や子どもの今後の支援についてフィードバックし最後にアンケート調査を行うことで、療育方法の共有とその運営方法を広め、その効果を確認する。

Ⅳ支援モデルの概要

感覚統合理論を利用した遊び活動の形をとる。その利点は「遊び」という子どもの日常的活動を軸にすることで日常の保育や子育てで実践しやすく、楽しさ、達成感、能動性を重視するため、子どもの自己有能感の育成やポジティブな人間関係の構築にも有効である。さらに子どもの情動や行動面の理解と配慮にも優れ、身体能力や認知能力、コミュニケーション能力の育成や発達にも寄与できる。

①活動モデルの構築：（場所）県立広島大学保健福祉学部（対象）軽度発達障害児 4～5 名のグループ 5 組。（頻度）月１回合計３１回。（内容）活動は作業療法士がボランティア学生を指導しながら運営。保護者向けプログラムとして保護者同士の情報交換、近況報告。ピアカウンセリング。

②活動モデルを３カ所の地域で、拠点施設の職員と共に作業療法士とボランティア学生で実践。

Ⅴ結果

紅梅保育所（２回）、ＮＰＯ法人ファイト、ぽっぽ教室（各々１回）にて実践を行った。内容は、打ち合わせ、準備、遊び活動（保護者向け講演、説明）、反省会であり、のべ参加人数は、保護者 57 名、拠点施設の職員 36 名、ボランティアの教員、保護者、保育士、セラピスト、学生 47 名であった。保育所職員は療育活動の基本的な注意や流れをよく理解し、子どもの把握もよくでき、運営も職員の創造性と主体性がよく発揮されており、活動運営のノーハウを確実に身につけた様子が窺われた。保護者、職員のアンケートには、「普段落ち着きのない子どもが楽しそうによく遊ぶことができ、後半は非常に落ち着いていた」、「よく子供同士でトラブルになるが、今回の活動では全くトラブルがなかった」「今後も継続して専門家の支援を行ってほしい」、「家ではできない遊びでとても楽しそうにしていた」「普段家では止めてしまうようなことも子どもがやりたいようにできたのですごく満足していた」「体を思い切り動かして楽しく遊ぶ事がこどもにとって大切なのだと分かりました。ダイナミックに遊べてよかったです。」等であった。また今後の課題として、幼稚園との連携、継続的な支援、就学児の支援に関する強い要望が出された。さらにボランティア保育士の感想には「関わる自分も子どもとしっかり楽しんで遊ぶことがまず大切！！大型遊具に飽きずにトライしている子どもの様子を見て、子どもが必要な感覚刺激は、子どもが自然に食べに来るという先生のお話に納得。今取り組んでいる検診事後教室に生かしていきたいです。」等があり、モデル療育の成果は非常に大きいことが判明した。